

エッセー

変わりゆく北極海（その 1）

思い出のアルファ・ヘリックス号—Tom 船長からの手紙—

滝沢 隆俊¹

私が北大・低温科学研究所から海洋科学技術センター（今は、海洋研究開発機構）へ移って、はや 20 年が過ぎました。当時の海洋科学技術センターは、赴任してすぐに同僚から「チョット前まで論文など書いたら上司から叱られた！大変なところですよ！」などと冗談まじりに言われるようなところでした。確かに、大学とは随分雰囲気の違いの職場でしたが、幸いにも同僚や上司に恵まれて悔やむことなくここまで来ました。むしろ、霞ヶ関や虎ノ門をうろついたり、まして米国 NSF ビルでの会合に出るなど、「あのまま大学にいたら経験できなかったであろう」歳月でした。もちろん、楽しい経験ばかりではありませんが。

移籍の契機は、海洋科学技術センターが北極海研究に乗り出したことです。背景として、国際的に北極海研究を取り巻く環境が大きく変わる時期でした。当時のソ連共産党書記長ゴルバチョフの 1987 年「ムルマンスク宣言」により「北極開放」政策が提案された事に端を発した、北極科学研究的国際協力とそれによる飛躍的進展がありました。一方国内では、1990 年に国立極地研究所に北極圏環境研究センターが設立されると同時に、科学技術庁でも科学技術振興調整費で「北極圏における国際共同研究」が始まるなど国内外で急激に北極研究の気運が高まった時期でした。

当時、学術研究は文部省で研究開発は科学技術庁と霞ヶ関用語で所掌が分かれていましたが、両者は科学研究では冷戦状態或はライバル関係にあったと言えます。科学技術庁としては、新興官庁として老舗の文部省に対抗する意識が強いものでした。海洋科学技術センターは科学技術庁の所管

であり、海洋の学界では新参の海賊が海洋研究に乗り出したような受け取り方をされていて、極地研究所に北極圏環境研究センターが出来た時期でもあり、ついに北極海にまで手を出すのかと思われたのかもしれませんが。また、当時の運輸省（気象庁や水路部）からは白い目で見られていたもので、省庁間の縄張り意識を実感させられました。

海洋科学技術センターでの私の役割は、いわば既に同僚が敷いた路線に列車を走らせ、更には路線を拡大することと言えました。移籍してすぐに、アラスカのソードに出張することになりました。アラスカと言えば、アンカレッジ、フェアバンクス、そしてバローくらいしか知らずに、ソードは何処にあるの？でした。アンカレッジから南へ車で約 3 時間の小さな港町ですが、夏には大型のクルーズ船も入り観光ガイドにも載っています。そこには、職員数人と小規模な実験施設があるアラスカ大学の Seward Marine Center (図 1) があり、アラスカ大学が運航する海洋観測船アルファ・ヘリックス号の母港となっていました。目的は、夏から秋にかけて



図 1 Seward Marine Center のほぼ全景

¹ 海洋研究開発機構



図 2 アルファ・ヘリックス号

アルファ・ヘリックス号(図2)を傭船するので、その事前打合わせです。アルファ・ヘリックス号は1965年就航の全長40mで当時でも船齢30年近い観測船としては非常に古い小船で、日本ならとくにスクラップにされています(我国の官庁船は、25年が更新の目安です。アルファ・ヘリックス号は2007年に売却されるまで、何と40年以上働きました)。そもそもアマゾン川やオーストラリアのグレートバリアリーフの調査を目的として建造されたので、喫水が浅いタライのような船です。そのため非常に良く揺れる船で、船員から岸壁に係留中も船酔いするよ!と脅かされました。この様な船で、夏とはいえベーリング海などの外洋に行く訳です。私は、海洋観測を生業にして来たとはいえ、プロの船乗りではなく年に1ヶ月くらいしか船に乗りませんので、アルファ・ヘリックス号での日々は、良くて軽い船酔い、悪いと吐き気をこらえながらベッドから振り落とされないようにしがみついているような時間が多かったと思います。多分、自分の船室で寝ていることより、船尾にある名ばかりの図書室のソファでゴロゴロしていた時間が多かったと思います(船は、船尾の方が揺れない)。

結局、5年間傭船したよく揺れ、乗心地が悪いボロ船であるアルファ・ヘリックス号での体験は、一番心に残っています。よく言われるように人の記憶は、嫌な事、つらい事は忘れ、楽しいことだけを残す様に出来ていることを実感します。アメリカの辺境であるアラスカでの私の体験が、全てのアメリカ人に普遍的とは思いませんが、彼らのやり方を身近に見てアメリカ人を善く知ると



図 3 食堂にて、Steve (左) と Tricia (右奥)

同時に勉強にもなりました。船上で特に印象的だったのは、安全に対する考えかたです。アメリカ人の全てがそうだとは言いませんが、ヘルメットをかぶらず、軍手も付けず、時にサンダルで作業するなど、日本の観測船では到底許されないものでした。自己責任と言うのでしょうか。また、船員は日本なら20人くらいの船員が必要ですが、船長、航海士、機関長、機関士、司厨員(コック)、観測技術員1~2名の総勢6,7名です。船は、海へ出ると24時間稼動ですので、航海と機関は12時間勤務です。船内での思い出は、いつも船酔いで気分が悪かった事を除けば、観測の合間に食堂(図3)で観測技術員のSteve(ブロンドで2枚目、気だてがいいお兄ちゃん)や司厨員のTricia(森公美子さんのような体格で和食を用意してくれるような優しいお姉さん)とよくビデオを見ました。もちろん、字幕がありませんので、私にとっては断片的に理解出来る台詞と映像でついに行くのですが、Steveの「Pretty womanのジュリア・ロバーツは俺の女さ」とかTriciaの「黒沢の七人の侍はすばらしい!」とかの会話を覚えています。

当時、偶然とはいえ、私が世話になった関係者にTomが3人いました。アラスカ大学海洋研究所のTom, Seward Marine Center所長のTomそして船長のTomです。Tomは、ありふれた名前とはいえ、3人も揃うのは驚きでした。一番世話になったのはTom所長ですが、印象に残っているのはTom船長です。最初の観測航海を終えてそろそろ下船かという頃、Tom船長に別れの挨拶に行くと、言葉のついでに船長特製のアル

ファ・ヘリックス号 T シャツを買わないかと言います。船長が T シャツを売るなど、日本では考えられないと思いますが、アメリカの社会規範？職業規範？の許容範囲の広さなのか、それとも船長の特異な個性（後述）なのか？

ある日、Tom 船長から手紙が来ました。「俺は今 Jail に入っている。Drug をやって捕まった。それで、俺が船長の仕事を誠実に務めていたい奴だと情状酌量を求める手紙を書いてくれ」と書いてありました。一瞬、Jail は刑務所？！とは和訳できても、Tom 船長と Jail が結びつかない（拘置所又は留置所と訳するのが正しいのでしょうか）。とは言え、読み返しても警察に捕まったしか考えられません。薬物犯罪を犯したのは間違いありませんし、そもそもアメリカの船は Dry Ship（船内での飲酒禁止。たとえ、港に停泊中でも）と薬物厳禁であり、それを監督するのが船長です。で、何をか言わんや！です。数日、どうしようか考えましたが、私の知る限り彼はまさにいい奴でしたので、手紙を書きました。最近の酒井法子の覚せい剤事件でも感じたことですが、薬物は自ら進んで服用するものですので、軽い気持ちで！と

か興味本位で！とかの言い訳を到底容認することは出来ないと思っていますが、いざ身近のものから助けを求められた場合にどうするか？「罪を憎んで人を憎まず」とか高尚なことを考えたわけではありませんが、好意を抱いていた人が犯罪を犯したときに起こる矛盾した思いを体験しました。

思えば、やけにハイ！になっているなと感じた時がありました。アリューシャン列島の島影で荒天待機をしているときでした。船長がやって来て、「Good Weather! 出航する」と言います。内心「まだ風が強いのに、大丈夫か？」と思いながらも秋の北太平洋の観測点へ。風は 15 m/s 以上でアルファ・ヘリックス号としては大波に揉まれる木の葉舟です。結局、風速 20 m/s にまで達して、再び退避。その時、何か Drug をやっていたか分かりませんが、やけに明るかったのを覚えています。

その後 Tom 船長から音信はありませんので、その手紙が役に立ったのかどうか分かりません。ずいぶん後で Tricia から、Tom 船長が感謝していたと聞かされました。

(2011 年 12 月 14 日受付)